

日本旧石器学会

ニュースレター 第35号

NEWS LETTER No. 35

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



## 旧石器時代研究とジオパーク活動

橋詰 潤 (明治大学黒耀石研究センター・日本ジオパーク委員会委員)

ジオパーク (Geopark、以下 GP と略称) は、「地球・大地 (Geo)」と「公園 (Park)」とを組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味し、地球 (ジオ) を学び、丸ごと楽しむことができる場所と説明される (日本ジオパークネットワークホームページ: <http://www.geopark.jp/about/>)。ユネスコの支援を受け2004年に本格化した世界GPの活動は、2015年11月にユネスコの正式プログラムとなった。2017年2月時点で、ユネスコ世界GPとして活動している地域は、33の国と地域に計119箇所存在し、日本国内にはその内の8箇所が存在する。日本では、現在43地域が日本GPとして認定されており、その内8地域は上述のようにユネスコ世界GPにも認定されている (図1)。このように、日本国内でも2008年にGPへの取り組みが本格化してから10年弱のうちに活動が急速に広がっている。

そして、GPは日本ジオパークネットワークのホームページ (<http://www.geopark.jp/about/>) で、「大地 (ジオ) の上に広がる、動植物や生態系 (エコ) の中で、私たち人 (ヒト) は生活し、文化や産業などを築き、歴史を育んでいます。ジオパークでは、これらの「ジオ」「エコ」「ヒト」の3つの要素のつながりを楽しく知ることができます」と説明されている。このようにGPでは、ジオの語から想起されやすい地形・地質だけでなく、それらと

その上に存在する動植物や生態系、そして人の歴史や文化との相互関係についても重要視されている。さらに、日本ジオパーク委員会のホームページ (<http://jgc.geopark.jp/whatsgeopark/index.html>) では、GPについて「地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数含むだけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む」と説明している。このように、GP活動では、地球の活動やその活動によって残された自然と、人がこれまでどのように関わってきたのかについて、両者をつなぐことができる存在として考古学的サイトも重視するべきである。こうしたことから、考古学とGP活動の連携は、今後様々な相乗効果を生み出すことを期待できる。そのため、橋詰 (2017) において考古学とGP活動の連携による相乗効果の可能性を以下のように整理した。①考古学は人の活動と地球の活動との関係を科学的な手法によって評価することを通じ、GP活動に貢献することができる。②GPが地形・地質遺産の保護・保全、活用をおこなう際に、これまでに考古学が文化財の保護・保全、活用に取り組んできた方法や経験を参照することができる。③考古学とGPとの連携は、考古遺跡を、人の歴史を研究する場に加え、地球科学的な側面から新たな視点や知識をもたらすとともに、人の歴史と地球の活動の両者の関わりを学ぶ場ともす



写真1 白滝ジオパークの構成資産 (八号沢黒耀石露頭)



写真2 白滝ジオパークの拠点施設 (白滝ジオパーク交流センター・遠軽町埋蔵文化財センター)

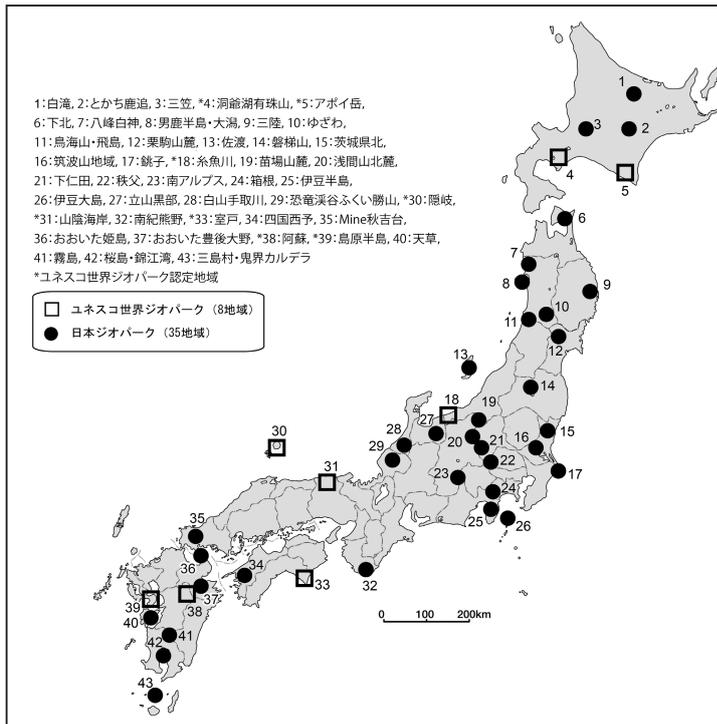


図1 日本ジオパーク認定地域 (2017年4月時点)

る機会を与えることができる。

以下では、特に旧石器時代研究に焦点を絞り、GP活動との関係や、連携によって期待される今後の可能性などについて紹介する。

旧石器時代研究の成果や視点が盛り込まれたGP活動を行っている地域として、北海道遠軽町を範囲とする白滝GPがある。白滝GPは、日本列島最大規模の黒曜石原産地を有しており、火山活動の遺産である黒曜石と、後期旧石器時代の白滝遺跡群を通じて、黒曜石を活用して最終氷期の環境下で生きてきた人類の資源利用について伝える場を提供している(熊谷2017)。GPの構成資産に多数の黒曜石原産地(写真1)が含まれている他、拠点施設として、地球科学的な視点から黒曜石について学ぶことができる白滝ジオパーク交流センターと、白滝遺跡群の豊富な資料を中心として人と黒曜石資源とのかかわりを学ぶことができる遠軽町埋蔵文化財センターが同居している(写真2)。同GPの活動は、地球科学と旧石器時代研究の連携事例として重要である。

中村(2017)は、人と岩石資源との関係について論じており、自らがおこなってきた石器石材研究を題材に、考古学とGP活動の連携の意義と、連携によってもたらされる可能性を論じている。糸魚川ユネスコ世界GP内のヒスイや透閃石岩、下仁田GP内の緑色岩などを取り上げ、旧石器時代以降、大地の上に居住し、そこにある岩石資源を利用してきた人と岩石資源の関係史を復元する重要性を指摘す

る。そして、道具素材としての石器石材研究は、人と地球との関わりの歴史を多角的に明らかにするという石器研究にとっても重要なテーマであるだけでなく(中村による次の記事も参照)、石器研究がGP活動に貢献できる分野でもあると説いている。

小野(2017)は、旧石器時代研究がGPと連携する意義を、地学的プロセスの一環として旧石器時代的現象を捉え、旧石器時代を資源環境の調和的開発の端緒として理解することに求めている。一方、旧石器時代研究がGPに可能な貢献として、自然史と人類史の接点の特徴を明らかにし、空間的に限定されたGPを、日本列島やユーラシアなどの空間の階層構造で理解することに貢献できることを示している。

GP活動では、地形・地質、動植物・生態系、人の歴史・文化などといった各要素の相互関係を語ることも重視されている。

こうした点は人類生態系アプローチ(出穂2007)のような、生態系の中に人類も構成要素として加え、人類と人類を取りまく環境構成要素との相互作用を明らかにするという研究手法を取り入れてきた旧石器時代研究にとって親和的である。加えて、地球科学的な分析手法をとり入れた地考古学(出穂2007, 佐藤2009など)など、GP活動にも関連する諸科学と協同で、あるいは地球科学研究者自身がその方法を用いて旧石器考古学的な課題を解明する研究も進められている。このように旧石器時代研究とGP活動との接点は既に複数存在している。そして、旧石器時代研究はGPに対する様々な寄与の可能性を有している。今後も両者の連携が進み様々な相乗効果生まれることに期待したい。

#### 引用文献

- 出穂雅実 2007「遺跡形成過程と地考古学」『ゼミナール旧石器考古学』、佐藤宏之編、同成社  
小野 昭 2017(印刷中)「人類-資源環境のダイナミクスから見る旧石器時代研究とジオパーク」『第四紀研究』56(3)  
熊谷 誠 2017「白滝ジオパークにおける黒曜石資源の保全と活用」『資源環境と人類』7  
中村由克 2017「石器石材の研究とジオパーク」『資源環境と人類』7  
橋詰 潤 2017「考古学とジオパーク活動の連携」『資源環境と人類』7  
佐藤宏之 2009「地考古学が日本考古学に果たす役割」『第四紀研究』48(2)

## 岩石学にもとづく石材研究のすすめ

中村由克（下仁田町自然史館・明治大学黒曜石研究センター）

石器の石材研究は、旧石器研究の中でも重要な部分を占めるようになった。一方で、黒曜石以外の石材については、その鑑定に不安があったり、産地研究が少なく移動実体が判明しないものが多い。局部磨製石斧の主要石材である透閃石岩（ネフライト＝軟玉）は、かつて考古学では蛇紋岩と言われてきたもので、正確な岩石鑑定をすることで国内産地の判別ができるようになった。その結果、黒曜石移動のネットワークとは異なった透閃石岩の移動・流通圏があったことが判明し、異なった系を重ね合わせることで、旧石器時代やそれ以降の人類の移動をより重層的に復元できる見通しができてきた（中村2015、2017）。

### 岩石学（地質学）にもとづく石器の石材研究

石器の石材を判別するためには、単に肉眼でながめて経験的に判断するのではなく、よりミクロなレベルでの検討が望ましい。筆者が用いている鑑定法は、実体顕微鏡で10倍から100倍に拡大して鉱物や構成粒子を鑑定し、岩石組織を判別して岩石名を決定している。さらに、比重の計測、ネオジウム磁石や帯磁率計を用いた磁性の測定、土色帖を用いた色調の記載なども併用し、岩石学（地質学）にもとづく石器の石材鑑定と記載をおこなっている。さらに、地質時代に受けた二次的な変質作用（珪化作用、接触変質作用、構造運動など）の痕跡を石材中から読み取れば、その石材の分布地をより細かに特定するカギとなる。実際に、石器の石材となる岩石は、通常の泥岩や砂岩といったような典型的な岩相の岩石分類の基本型でなく、多少何らかの変質を受けたり、特殊な特徴をもつものが多いのが通例である。そのため、このような特徴を知ることができれば、同種の地層・岩石分布帯の中から、石器になった石材を特定することが可能になる。

### 「石材のつどい」のとりくみ

2013年から関東・中部地方のメンバーを中心に「石材のつどい」研究会が発足し、年1～2回の会合や石材のつどいニュース（ネット配信）を発行している。この会は時代を特定せず、石器や石製品の石材をめぐる研究情報交流をめざしている。2016年3月の第6回では、下呂石をテーマ（下呂市・45人参加）に、原産地情報と利用について討議した。毎回、学生・院生の参加もあり、遠くからの参加者も加えて、たくさんの石器や石材サンプルを前に熱い討論がされている。

また、考古学のメンバーが自分の力で石材鑑定ができるように、筆者が講師となった自前の「石材鑑定研修」をこれまで3回実施した。大学の考古学カリキュラムでは、石器の石材を扱うための地質学・岩石学の授業はほぼ行われていないため、石材研究を志すメンバーの基礎力向上の試みである。今後、希望者があれば開催する予定である。

### 石材研究の向上をめざして

報告書作成などの機会に、石器の自然面の記載をすること、できればその写真があると、石器の石材が採集された場所を特定する資料となる。石材の露頭近くで、あるいは河川のどんな場所で採集されたものかは、残された自然面の形状から素材礫の大きさや円磨度、緻密質石材なら衝撃痕（パーカッション・マーク）を調べ、実際の河川でのそれらの形状と比較することで、当時の石材採集可能地を限定していくことができる。また、報告書に石器のカラー写真を付すことができれば、石材の色調は大きな石材情報となる。

地質学では石器を前にしたとき、風化した表面で正確な石材鑑定はできないという。しかし、石器の風化面をみると、鉱物が飛び出したり、溶けた穴になったりして、外形が見やすくなったり、石斧などの風化した研磨面では岩石組織がよく見えたりすることがよくあり、このような場所を注意して観察することで、石器を非破壊で石材鑑定することは十分可能である。石器の石材は、黒曜石やサヌカイトなどの良質な広域石材だけではないので、在地石材と言われるものにも目を向けて先史人類が利用した岩石資源をトータルな形で研究していくことが求められている。（連絡先：naka-m@opal.plala.or.jp）



秋田県立博物館での石材鑑定研修（2015年11月）

## 引用文献

- 中村由克 2015「後期旧石器時代における透閃石  
岩製石斧のひろがり」『旧石器研究』11  
中村由克 2017「石器石材とジオパーク」『資源  
環境と人類』7

**2017年度日本旧石器学会  
総会・研究発表・シンポジウム  
のご案内**

2017年7月1日(土)・2日(日)に慶應義塾大学三田校舎におきまして、下記のとおり日本旧石器学会第15回総会・研究発表・シンポジウムを慶應義塾大学民族学考古学研究室との共催で開催します。シンポジウムは、「使用痕分析を統合した行動研究の展開」と題し、現在も発展を続ける使用痕分析をテーマとします。日本では、使用痕分析は石器等の使用方法・被加工物の推定を基本としながら、その前提となる埋没後変化の問題、光沢面の認定問題のほか、観察機器等の諸課題についても議論を重ねてきたところです。ただし、現状では個別石器の機能推定研究が中心となっており、今後はその成果を人類の行動研究や、技術的組織における「使用」の位相を解明する研究へ、より積極的に組み込んでいくことが必要と考えられます。本シンポジウムでは、使用痕分析の現状と課題を共有することにとどまらず、これまでの分析成果を人類の行動研究に統合し、より豊かに旧石器社会を描き出していく方策を展望します。

## 7月1日(土)

会場：慶應義塾大学 三田キャンパス

(東京都港区三田2-15-45)

総会・研究発表会場：東館8階ホール

ポスター会場：東館3階展示スペース

○データベース・ワークショップ(10:00~12:00)

\*総会会場で開催

(詳細はワークショップのお知らせ記事を参照)

○総会(13:30~14:30) \*12:30受付開始

○研究発表(14:40~17:30)

\*一件20分(質疑込み)

- ・及川 穰・隅田祥光・宮坂 清・粟野翔太  
「地質学・考古学的な踏査成果を基にした霧ヶ峰  
黒曜石原産地と遺跡の認識に関する考察」
- ・橋詰 潤・シェフコムード I. Ya・内田和典・長沼  
正樹  
「ロシア連邦アムール川下流域における土器出現

期の研究—基準資料作成に向けた日露共同調査  
遺跡の検討—

- ・野口 淳  
「石器集中部再考—定量分析にもとづく空間分布  
上の単位性の評価—」
  - ・中村由克・藤野次史  
「流紋岩・凝灰岩石材の岩石学的検討—広島県西  
条盆地の高田流紋岩類—」
  - ・海部陽介・佐藤宏之・後藤 明・池谷信之  
「旧石器時代の航海—その謎にどう迫るか?—」
  - ・赤井文人・山原敏朗・中沢祐一  
「晩氷期における狩猟採集民の石材消費戦略—北  
海道十勝平野および石狩低地帯南部石器群の比  
較—」
  - ・内田和典・ネステロフ S.・タバレフ A.・森先一貴・  
國木田大・松崎浩之  
「極東地域の更新世終末から完新世移行期にお  
ける考古学的文化の再構築—グロマトウ—ハ文化  
の年代的位置づけを中心に—」
  - ・鈴木建治・高倉 純  
「北極圏の旧石器研究の現状」
- 懇親会(18:00~20:00)  
会場：南校舎4階 ザ・カフェテリア

## 7月2日(日)

シンポジウム会場：東館8階ホール

ポスター会場：東館3階展示スペース

○シンポジウム『使用痕分析を統合した行動研究  
の展開』(9:30~12:00) \*9:00受付開始

- ・森先一貴「趣旨説明」
- ・山田しょう「総論」
- ・御堂島正「石器実験痕跡研究の可能性」
- ・沢田 敦「技術組織・ライフヒストリー・痕跡分析」
- ・佐野勝宏「狩猟具の発達とその進化・行動論的意義」
- ・岩瀬 彬「日本列島後期旧石器時代における石器  
使用の変異性とその含意」

&lt;昼食休憩 12:00~13:30&gt;

- ポスターセッション・コアタイム(12:30~13:30)
- ・下岡順直・佐藤宏之・コリセタール R.・野口  
淳・長崎潤一・高屋敷飛鳥・舟木太郎「イン  
ド、ジュワラプラム遺跡群における光ルミ  
ネッセンス年代測定の試み」
- ・夏木大吾・國木田大・佐藤宏之・青木要佑・太田  
圭・増子義彬・熊木俊朗・本吉春雄「北海道遠  
軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点出土の縄文時  
代草創期石器群」
- ・国武貞克「カザフスタン後期旧石器時代研究の現

状と課題」

- ・光石鳴巳・白石 純・森先一貴「二上山周辺地域におけるサヌカイトの産地同定研究」
  - ・鈴木美保「下原・富士見町遺跡出土の有樋尖頭器関連資料について」
  - ・平澤 悠・渡辺丈彦「慶應義塾大学所蔵大山柏資料に含まれる楔形細石刃核とその学術的意義」
  - ・高倉 純「北アジアIUPの分布と年代」
  - ・野口 淳・日本旧石器学会データベース委員会「日本旧石器学会データベース委員会の取り組み(1)ー2010年版の更新・改訂とDB連携ー」
  - ・近藤康久・日本旧石器学会データベース委員会「日本旧石器学会データベース委員会の取り組み(2)ーハテナソンによる論点整理とハンズオンによる共同編集講習ー」
  - ・神田和彦・石川恵美子・宇田川浩一・赤星純平・根岸 洋・日本旧石器学会データベース委員会「日本旧石器学会データベース委員会の取り組み(3)ー秋田県における更新・改訂作業についてー」
  - ・高田祐一・国武貞克「全国遺跡報告総覧における旧石器関係シソーラスの構築」
- ※ポスター会場では併せて以下の展示を行います。
- ・尻労安部洞窟発掘調査団「青森県東通村尻労安部洞窟の発掘調査成果」

○パネルディスカッション (13:30~15:00)

○講評 (15:00~15:15)

○閉会 (15:15~15:30)

会場案内

- ・慶應義塾大学 三田キャンパス  
(東京都港区三田2-15-45)

<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/mita.html>

(会場は東門の上になります。)

宿泊

宿泊の斡旋はいたしませんので、各自でご手配ください。

参加申込

同封の葉書に必要事項を記入の上、**6月16日(必着)**までに事務局までお申し込み下さい。また、やむを得ず欠席される場合は、会則第5条により、欠席の委任状を含め全会員の5分の1以上の出席をもって総会が成立しますので、同葉書下段に記載された委任状に記入、押印のうえ投函願います。

APA 新執行体制と  
小野昭会員の名誉会長選出について

APAは中国のXing GAO会長による前期執行体制(2015年1月~2016年12月31日)が終了し、2017年1月1日より今期執行体制が発足しました。昨年、首都大学東京で開催された第8回APA日本大会期間中の6月25日に執行会議が開催され新執行体制が決定しました。会議では小野昭会員がAPA名誉会長に選出されると共に、いくつかの議題が検討されましたのでその要点を報告します。

(1)新執行体制について

APAの執行体制は1期2年であり、昨年の執行会議において今期執行体制が決定しました。任期は2017年1月1日~2018年12月末です。新しい執行体制は次のとおりです。

会長：Andrei KRIVOSHAPKIN博士 (ロシア)

事務局長：Evgenii RYBIN博士 (ロシア)

ロシア：Konstantin PAVLENOK博士

(以上執行委員)

中国：Youping WANG 教授 (副会長)、Xing GAO 教授、Shejiang WANG教授

韓国：Gikil LEE教授 (副会長)、Hyeongwoo LEE 教授、もう1名未定

日本：佐藤宏之 (副会長)、出穂雅実会員、佐野勝宏会員

\* 下線を引いた委員は各国の連絡担当執行委員。

現在のAPA執行体制は、加盟国であるロシア・中国・韓国・日本の国内旧石器学会(および相当する学術団体)から推薦された3名(副会長1人、執行委員2人)で構成され、次期執行体制の会長は任期末の会議において選挙で決定しています。これまで会長はロシア・韓国・日本・中国の順で選出されており、今期はロシアのAndrei KRIVOSHAPKIN博士が新会長に選ばれました。

(2)次回APA開催地について

新体制の決定とともに、次回(第9回)APAは2018年にロシアで開催されることとなりました。APA大会は第8回から隔年開催となりましたので、2017年の大会開催はありません。次回開催地は現段階で未定ですが、アルタイ地方を中心に検討が進められています。この点については新しい情報が入り次第、ニュースレターなどで開催のお知らせを行います。

(3)小野昭会員の名誉会長選出

2013~2014年度にAPA会長を務められた小野昭

会員が、満場一致で名誉会長に選出されました。名誉会長の選出は、ロシアのAnatly DEREVIANKO教授、韓国のYungjyo LEE教授に続き3人目です。

#### (4)APA加盟国の拡大について

本件については2014年の執行会議において、インド、モンゴル、および東南アジアの複数の国からの参加希望を念頭に、大会開催能力を有する国内規模の学術団体を設立しそれを単位とするならば加盟を検討する、という方向で基本的に了解されましたが、今回の執行会議ではより具体的に検討が行われました。各国の執行委員からは、2007年の設立合意の改訂を行うのか、設立4か国と今後参加する国々との関係はどうあるべきか、会議の開催費用はどのように負担するかなど、実現のためには多くの課題があることが指摘されました。また、個人での加盟資格についても特にアジア以外の欧米諸国の個人研究者の希望が増えていることを念頭に検討が行われ、ホームページの開設、隔年開催のAPA大会の連絡リストの作成と運用を進めつつ、他の国際学会組織の運営方法等についても調査し、次回執行会議で詳しく議論することとなりました。また、若手研究者のための発表賞の創設も検討されることとなりました。(出穂雅実)

### 「日本の旧石器時代遺跡」データベース 更新へのご協力をお願い

日本旧石器学会では、2016年6月に「日本列島の旧石器時代遺跡」データベースをウェブ公開しました(<http://palaeolithic.jp/data/index.htm>)。現在データベース委員会では、データの更新・追加とともにより使いやすいものへ改訂を進めています。主眼は、位置データの確認・修正と、書誌データの外部連携です。これまで、2016年12月に秋田、今年4月に島根(中四国)で、実際の作業手順を確認するワークショップを開催し、マニュアルを整備しています。7月1日の第15回総会の当日午前中にも、総会会場(慶應義塾大学三田キャンパス東館8Fホール)において別記の通りワークショップを開催いたします。各地域・都道府県等においてデータの更新・追加にご協力いただける皆様のご参加をお待ちしております。なお2017年度は、各地域・都道府県ごとの更新・追加を本格的に開始します。データベース委員会では、以下の通り分担して対応します。すでに打診・依頼を受けた方もいらっしゃるかと思いますが、引き続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。

#### データベース更新・追加分担

北海道・東北・新潟：鹿又喜隆・神田和彦、関東・甲信静：野口 淳、東海西部・北陸・近畿・中四国：光石鳴巳、九州：馬籠亮道

#### データベース更新ワークショップの 開催について

「日本の旧石器時代遺跡」データベースのウェブ版更新・追加は、インターネット上での共同編集作業(クラウド・ワークス)として会員のみなさまのご協力を得て進めます。その基幹は、位置情報の確認・修正と、奈良文化財研究所「全国遺跡報告総覧」やCiNii Booksなど書誌情報データベースとの連携となります。一連の作業は、インターネット上の各種サービス等を利用して行います。データベース更新・追加にご協力いただける方、ウェブ版データベースに興味・関心のある方、どなたでも参加いただけます。事前準備が必要となりますので、下記要項を確認の上、あらかじめ参加申し込みをいただきたいと思います。

#### データベース更新ワークショップ in 東京

日時：2017年7月1日10:00～12:00

会場：慶應義塾大学三田キャンパス東館8Fホール

※総大会会場と同じです

内容：ウェブ上での遺跡位置の確認・修正、書誌情報の確認・追加、遺跡データベースの更新

※WiFiを利用できるコンピュータをご持参ください。

※事前にマニュアルと作業用データを共有しますので、参加申し込みをお願いします。

※作業上Googleアカウントが必要となります。お持ちでない方は予めの取得をお願いします。

※大会中、データベース委員会よりポスター発表を行いますのでワークショップに参加できない方もポスター会場にお運びください。解説させていただきます。

※ワークショップ参加申し込み先：

fujimicho0@hotmail.com(野口)まで。

### 関連学会情報

#### 東北日本の旧石器文化を語る会 第30回記念大会開催報告

2016年12月17日(土)・18日(日)、「東北日本の旧石器文化を語る会」第30回記念大会が東北大学の川内南キャンパス(文科系総合講義棟)に

て開催された（写真1、2）。

はじめに藤原妃敏氏（福島県立博物館）による記念講演（「東北日本の旧石器文化を語る会」30年をふりかえって）が行われ、本会の設立の目的や、地域枠の設定された背景、その後の活動などが紹介された。特に2000年の前期旧石器遺跡捏造事件を前後した経過についての、反省の弁を交えた言葉には、今後の研究を支える若い世代にとっても多くの教訓があったように思われる。

続いて、シンポジウム「東北日本の旧石器時代研究－回顧と展望－」がおこなわれた。10本の発表があり、ここでは内容の詳細を略し、タイトルと発表者のみを以下のように記す。

①「東北日本における旧石器時代編年研究」

沢田 敦氏（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）

②「タイポロジーに関する回顧と展望」

鈴木 隆氏（仙台市教育委員会）

③「石器製作技術の展望と課題」大場正善氏

（公益財団法人山形県埋蔵文化財センター）

④「石材を巡る研究の現状と課題」吉川耕太郎氏

（秋田県立博物館）

⑤「東北日本における旧石器の機能論」

鹿又喜隆氏（東北大学）

⑥「東北日本における遺跡形成研究の現状と課題」傳田恵隆氏（宮城県教育委員会）

⑦「旧石器時代から縄文時代草創期における東北日本の植生史研究と課題」

吉川昌伸氏（古代の森研究舎）

⑧「東北日本における旧石器・縄文時代移行期の研究」長井謙治氏（東北芸術工科大学）

⑨「東アジアの旧石器研究回顧と東北日本の旧石器研究展望」佐川正敏氏（東北学院大学）

⑩「プロセス考古学35年と東北日本の旧石器文化」阿子島 香氏（東北大学）

そのほかに、ポスターセッションとして、7件の調査・研究の成果のご発表があった。ディスカッションでは研究領域を横断しての議論が交わされ、旧石器時代研究の現代的な課題が浮き彫りにされた。今後、本会では、30周年記念論集を作成し、これまでの研究成果を総括すると共に、発展的に継承すべく、取り組む計画である。（鹿又喜隆）



写真1 東北日本の旧石器文化を語る会



写真2 討論風景

---

パレオアジア文化史学A01班研究集会  
「日本列島における新人文化の形成過程」  
開催報告

---

2017年3月4日（土）に静岡大学静岡キャンパス人文社会科学部E棟101教室において、文部科学省科学研究費新学術領域研究「パレオアジア文化史学 - アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 -」A01班研究集会「日本列島における新人文化の形成過程」が開催された（写真3）。近年、日本列島における新人の出現期である後期旧石器時代前半期の研究が進展しているが、新人の出現（移入）過程の評価やその後の考古資料の変遷過程の評価（環境の変化への適応or新しい文化の流入など）については研究者の間で見解が分かれる点も多いように思われる。こうした現状を踏まえ、方法や解釈において異なる立場をとる研究者が、①新人到達以前、②新人の到達、③新人到達後の考古資料の変化、それぞれをどのように解釈するのか報告して研究方法や解釈について議論することと、中国や韓国の資料に関する報告も加え、東アジアというより広い空間的スケールで研究の現状と課題について考えることを意図して研究集会が企画された。そうした報告や議論を通じて、パレオアジア文化史学の目的であるアジアにおける新人文化形成プロセスを明らかにする上での課題を考えるとともに、プロジェクト内の他分野の研究者と、考古学の研究対象や方法に関わる情

報を共有することも意図されていた。

研究集会の報告内容と報告者は以下のとおりであった。

趣旨説明 高倉 純

「日本列島の旧石器時代遺跡—データベースから見た分布と立地—」 野口 淳

「新人が出現する頃の行動多様性」 仲田 大人

「日本列島における後期旧石器時代前半期の石刃技法」 森先一貴

「日本列島の後期旧石器時代前半期における石器素材利用形態の画期」 山岡拓也

「中国東部における新人文化出現期の様相」

加藤真二

「韓国における最近の旧石器研究」

松藤和人・中川和哉

議論

研究集会は13時00分に開始され17時00分に終了した。発表時間や質疑応答の時間が長引いたため、当初1時間を予定していた議論の時間は、およそ15分間となった。全体の議論の時間は非常に短くなったものの、各発表者の発表後には活発な質疑応答が行われた。各発表や質疑応答での議論を通じて、石刃技法の出現や変化をどのように考えるのかということと、礫石器や不定形剥片石器を含む石器群が継続する現象をどのように考えるのかということが、東アジアや、アジア全体で新人文化形成プロセスを明らかにする上での課題であると認識された。

(山岡拓也)



写真3 パレオアジア文化史学A01班研究集会

## お知らせ

### メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利

用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものです。ただ、運用から3年以上がたちましたがまだ会員の約3割の方にしか登録いただけていません。まだ登録していない会員諸氏におかれましてはメーリングリストにご登録ください。メールアドレスを、事務局のメールアドレス(jimu@palaeolithic.jp)までお知らせください。速やかにご利用できるようにします。強制するものではありませんが、ご協力をお願い申し上げます。

### 会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されていますので、会費は原則前納制としております。本ニュースレター同封の払込取扱票を用いて、今年度分会費の納入をお願いします。

また、会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、同封の会費納入状況を御確認のうえ、2016年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。

なお転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

### 日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード (<http://palaeolithic.jp/join.htm>) し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第35号  
2017年5月10日発行  
編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会  
氏家敏之・橋詰 潤・馬籠亮道  
発行: 日本旧石器学会  
事務局: 〒192-0364  
東京都八王子市南大沢1-1  
首都大学東京 都市教養学部  
人文・社会系 歴史・考古学分野  
E-mail jimu@palaeolithic.jp  
HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>